

連載 私の町はどんな町①

— 蕨市・戸田市 —

今シリーズは皆さんの住む町の歴史を取り上げる新シリーズです。中山道を北へたどりませう。

蕨市は面積が日本一小さい市で、川口市と共に川口低地と呼ばれる沖積低湿地帯のため植物のわらびは生えない。蕨という地名の由来は一説に、六歌仙の一人、在原業平が武蔵野を旅していた時泊めてもらった家で、囲炉裏にわらをくべていた。訳を聞く

と、この辺りには樹木が無いので薪がなく、わらで暖をとっているとのこと、これを聞いた業平が、この名もない里に「藁火の里」と名づけた。とあります。

江戸時代の「蕨宿」は、埼玉県下中山道九宿のうち最も栄えていました。「戸田の渡し」を控え度々の荒川川止めのため旅籠が多く、飯盛女も沢山いて繁盛していました。宿中央にある宿本陣跡が資料館になっていて蕨を知る多くの資料が展示されています。見どころの一つに市役所の裏に「甘露山長泉寺」がありま

す。寺域の大半が駐車場や住宅になったので鐘楼の行き場がなくなり、新築した伽藍の屋上に梵鐘が据えられています。屋上の梵鐘の光景は珍しい。

近くの公園に「蕨城跡」の大石碑が立っています。「風土記には、蕨城は四方二町ばかりなる平地。」とあるから、弓矢の戦いに耐え得る程度のものであったろうと思われま

す。南北朝時代に築城して約七十年間で落城し消え去っています。北町三丁目に女工哀史の悲惨な歴史の跡が残っています。蕨地方は明治期に機織りの町として栄えて、徳丸家の裏に塀に囲まれた数棟の工場の跡が残っています。その周囲は二米程の堀で囲まれ（今は石の蓋がしてある）出入り口の一部に一枚板の橋が架けられています。板の外側に鎖

が付けられ夜間は板を跳ね上げて女工達の逃亡を防ぐ為の仕掛けのある「はね橋」が今も残っています。極めて過酷な雇用状態が横行していたのであろうと思われませう。

蕨市役所から中山道を挟み一キロ弱の距離に戸田市役所があり、両市の合併話があるがなかなか前に進みませう。戸田市は昔から財政が豊か

で、税金や公共料金が周辺都市に比べ安いのです。中山道時代でも、「戸田渡船場」は蕨宿と共に下戸田村が管轄していた、(明治八年戸田橋完成まで)その日の水量によって勝手に二倍・四倍と値上げをして暴利を貪っていたとのこと、但しお武家さんは無料

だったというから、今の議員さんがJR乗り放題無料という風習が昔からあったと思うと恨めしい。現在は戸田ポーターの収益が市の財政を潤しているようです。戸田市西部の笹目地区は、荒川の度重なる氾濫で肥えた土砂が流れ込み土壌が良くて米の生産率が高く、往時武蔵

国中でも最高に評価されてきました。

笹目郷(佐々目郷)(現在の笹目・美女木・さいたま市内谷・曲本・松本)は、鎌倉時代に、鎌倉鶴岡八幡宮へ寄進され江戸時代初期まで鶴岡八幡宮の神領地でした。年貢米が多いので笹目郷は鶴岡八幡宮の財政の七〇%を賄っていたとのこと。美女木にある「美女木八幡神社」は鶴岡八幡宮の分社として栄えた古刹で、頼朝が奥州討伐の時必勝祈願に立ち寄っています。

戸田市西部地区と鎌倉との密接な関係から、埼玉県内を通る鎌倉街道(上つ道・中つ道・下つ道)とは別に、荒川沿いに美女木八幡社の前を通り笹目橋下流の「早瀬の

渡し」に至る「鎌倉古道」と云われる街道があり、往時を偲ばせる足跡が残っています。

蕨市・戸田市は、埼玉県と云うより東京都のベッドタウンとして益々発展していくものと期待しています。(パシフィックパレス武蔵 浦和 小島次郎)



美女木八幡神社